



Kirisumi

第15号

- 1 「之」と「不」
- 2 唐紙師宮田三郎のこと
- 3 日本美術における書

山口謠司 (大東文化大学教授)
 田村彩華 (成田山書道美術館学芸員)
 柳田さやか (東京藝術大学助教)

「之」と「不」

山口謠司

幕末のことである。小石川の伝通院に福田行誠(一八〇五―一八八八)というお坊さんがあった。行誠は、伝通院住職の後、増上寺住職、京都知恩院住職、浄土宗管長等を歴任している。

文久二(一八六二)年、五十六歳の時、行誠は、「大般若波羅密多經」六百巻という大部の本を印刷しようと企画した。

經典を印刷するということは、仏教徒にとつては仏の功德を世界に弘めるという意味でとても重要なことであった。

中国では北宋から始まって金、元、明、清と各時代に国家の助成などを受けて「一切經」とか「大藏經」と呼ばれる仏教經典五〇四八巻が何度も印刷されているし、朝鮮半島でも十一世紀前半と、十三世紀中葉には「高麗藏經」が印刷されている。我が国でも、江戸時代に入ると慶安元(一六四八)年、南光坊天海による「寛永寺版(天海版)」が幕府の助成金で印刷され、また黄檗宗の僧・鉄眼が全国行脚を行って資料を集めて作った「鉄眼版」などが知られている。

さて、「大般若經」六百巻を印刷するにはどうすればいいかと、行誠はさっそく画家・菊池容斎(一七七八―一八七八)に訊いた。

すると、まもなく、容斎は、彫刻師の朝倉金兵衛と摺物師の山城屋安左右衛門を伴い伝通院に現れて言う。

一行二十字詰め、一ページを十行で印刷した場合、印刷のための版木が一萬二千枚。三百部印刷したとして、紙だけで三百九十六万枚。

その他に、墨や刷毛、馬連などの摺写用品一式。また、版木の彫刻に必要な小屋やそれを保存するための倉を建てること。費用とすれば「慶長大判数十枚(現在の三億円相当)」。

しかし、そんな金が行誠にあるはずがない。幕府の助力を乞うか、あるいは鉄眼和尚のように全国を行脚して資金を集めるか。

その時だった。行誠の弟子・細谷琳瑞(一八三〇―一八六七)が、急場を救う案を出すのである。

彼は、行誠にも劣らない読書家であり蔵書家であった。

琳瑞は所蔵する本の中に、慶長四(一五九九)年に刊行された後陽成天皇勅版の「古文孝經」や文久元(一八六一)年

に喜多村直寛が出した「太平御覽」千巻があったのを夢の中で思い出す。

「活字」で印刷すれば、整版による印刷の経費のうち、版木の購入費彫刻費、それに彫刻作業のための小屋、また版木保存の倉の造成を削ることができる。

堀口蘇山(伝通院本木活字板)大般若經解説)によれば、勝海舟のお膳立てで、彼らは喜多村直寛から「太平御覽」印刷に使った活字十三万六千字をもらいうけ、文久元(一八六一)年に印刷は始まり、校訂を経て最終的に慶応二(一八六六)年に完成した。

しかし、幕府の中には、幕府侍医法眼である喜多村氏の活字を作成するための費用は徳川家から出たものであつて、これを無断で第三者に譲渡したとして不服を言うものがあつたらしい。そしていつかこの不服は、琳瑞への憎しみに変わっていった。

どこかに難癖をつけなければならぬ。彼らは序文にある「上樂堯爾之治、下仰文武之治」という文章を楯玉に挙げたとされる。

この漢文は、「上は堯爾の治を楽しみ、下は文武の治を仰ぐ」、つまり「政治を執り行う人々はゆつたりとした平安の政治を楽しみ、また庶民はそこにあらわれる文化や武術の政治を仰ぎ見る」という意

味の言葉である。

しかし、木活字で作られた「之」という漢字は第一画の「一」が垂直に下へ伸び、第二画の左から右に伸びる線がほとんど消えかかり、下のはらいの部分がまっすぐになつてまるで「不」という漢字をひっくり返したように見える。

本書の印刷に不満を持つものたちは、これを上のようには読まず、「孟子」に見える「治人不治(離婁篇)」から取つた文章として、「政治綱紀が治まらず、施政教化も治まらない」と読み、倒幕を標榜するものとしたのである。

こうして、慶応三年十月十八日夜、高橋泥舟宅を訪れた帰り道、琳瑞がまもなく伝通院に入ろうとしたところを何者かが、刀で斬りつけ琳瑞は絶命した。

行誠は諸国に配つた「大般若經」を全部回収し、当時建造中であつた品川沖、お台場の海に投流したのだった。

「伝通院本木活字板」大般若經解説)を著された堀口蘇山氏は、昭和三十六年(序文には昭和三十七年二月とある)、「それが残巻ながらも海中より出現した」としてそれを所蔵し、琳瑞自筆の校訂などについて詳しく調査をされている。また、書誌学者長澤規矩也博士は、昭和五十二年刊「図書学参考図録 第四輯」に本書の書影を掲載し、更に日本書誌学大系61「近世活字版図録」(平成二年刊、青裳堂書店)にも本書の写真が載せられている。

「之」と「不」の形の関係、それを読む人の心の在り方、文字には、こうした「靈性」のようなものが宿っているのではな

いかと思うことがある。

(大東文化大学教授)

唐紙師

宮田三郎のこと

田村彩華

宮田三郎

料紙加工の仕事は、紙を見ただけでは誰の手になるものか判断がつきにくい。制作者の名が刻まれることのない仕事で、分業によって一枚の紙を完成させることも少なくない。戦前期に京都で活躍した宮田三郎は、唐紙をはじめとする裝飾料紙を手掛けたが、これまでにその存在が語られることは少なかった。

宮田の署名がある作品を成田山書道美術館で所蔵していたことや、安東聖空や正筆会との関係性が見えたこと、宮田の版木を仮名料紙専門店こきんで確認できたこと、御息女山本泰子氏に話を伺えたことで明らかになった宮田の仕事を紹介したい。

東京に生まれ、二十歳ころから洋画家の岡田三郎助に指導を受け、壁紙文様の研究に励んだ宮田は、襖紙の唐紙制作をしていたが、吉澤義則や安東聖空との出会いにより、仮名に適した料紙研究、制作を始めた。宮田製料紙は、鳩居堂を通して頒布されており、さらに正筆会の講習会で料紙制作を語ったり実演したり、頒布会をしたことで、関西を中心に宮田の料紙が多く用いられた。宮田は、唐紙を得意にすると同時に、染紙や箔加工、墨流しや継ぎ紙、下絵などの裝飾、さらに紙をしなやかにする打紙、冊子本や卷子本の

装丁までを一貫してひとりで行っていた。自宅を料紙研究所として、積極的に自製の料紙を展示したり、即売会を行ったり、料紙文化の拡大に力を入れて取り組んでいた矢先、昭和二十一年に五十三歳で亡くなった。

宇治市木幡

東京に生まれ育った宮田が、紙漉きや料紙制作のために水の良い小川を探し回って選んだ土地が、京都府宇治市木幡金草原。家のそばには木幡池につながる小川が流れており、京都にも奈良にも出やすいこの場所が好都合だったのだろう。

JR木幡または京阪木幡駅、JR六地蔵駅から徒歩十五分ほどの場所である。昭和十二年九月にこの土地を得て、十三年八月に自宅と工房が落成、転居している。山本泰子氏によると、家の半分が住まいで、もう半分が工房。昭和三十年代ころまでは竹藪の中にポツンとひっそりと佇む平家で、道路からも目立たなかったという。紙漉きは手がけなかったが、周りの田畑には和紙の原料である楮や雁皮、三椏などの植物を育てていた。自宅の庭の一隅に展覧場を設けて作品を陳列し、展覧を行ったり、即売会をしたりして、さらに料紙研究を深めるための施設を思い描いて拡張計画をしていた。

残念ながら現在その建物は残っていないが、令和二年十月十七日にその地を訪れた。真冬のように肌寒く、雨降りだった。JR木幡駅を降りて、当時の住所を頼りに車通りを歩いていくと、あたり一帯は住宅街。近くの高校の下校時間と重なり、賑やかな学生の声が聞こえてくる。実際に宮田が求めたその川は、今でも大

通りと並行して流れていて、それだけが当時の面影を感じさせた。こうした環境を宮田は求めて、静かに仕事をしていたのだろう。

宮田製料紙

成田山書道美術館に唯一、宮田の署名が確認できる作品が残っている。唐紙の冊子本で、西谷卯木が「山家集抄」を揮毫しており、日展か何らかの展覧会に出品したものだろう。最後の折りのノド近くに「上代様御唐紙師宮田三郎作」と辛うじて署名が確認できる。桑田笹舟は、宮田の料紙には「御唐紙師宮田三郎作」と雲母で卷子本・冊子本の終りに刷つてあった。「楽我記」三」と述べており、この内容と一致するが、これは胡粉を用いているように見え、これが版なのか手書きなのか定かでない。全く同じ署名がほかにも確認することができれば、版である可能性が高いが、現在は確認できていない。この冊子本は両面唐紙で三枚を一折として、六折をまとめた綴葉装で、装丁も宮田の手になるもの。紅、白、薄茶、藤、茶、黄、薄黄、浅葱など色とりどりの具引き地に、芥子唐草や蓮唐草、亀甲、七宝繫、たんぼほ、牡丹唐草などを雲母摺りしている。表紙は宮田が好んで使用した菱取梅花文が使用されている。

田中親美の唐紙と比べて宮田の作は、雲母に対する水の分量が多いのか、また他の材料によるものなのか、雲母の液をゆるく作っているものと考えられる。雲母は淡く、摺りにムラがあり、とろっとした琳派の調子を感じさせる。雲母の粒も大小を混ぜているのだろう。淡くムラになっ

によって雲母の濃度に差があり、意識的に調整していると見られる。親美の均一で隅々まで行き届いたはつきりとした輪郭の摺りは機械的で、安東聖空も桑田笹舟もどこか冷たさを感じたといいい、これが親美と宮田との違いなのかもしれない。具引きの胡粉も薄く引かれており、これも雲母と同様である。引き染めしていることは目視でも確認できるが、ほとんど刷毛目は見えず、均一に引いている。色調は中間色が多く、紙は鳥の子と見える。最後に打紙が施されていると思われ、紙は締まって平滑、卯木の筆も文様に引かかるとはなく書き進められている。

西谷卯木筆 山家集抄 一冊

